

大雨警報

至田有峰

それは季節通りに莊嚴に巡行する無色服の王
虚弱で散漫な者に警戒的な死をもたらす

その晩夏の夜に訪れた集中豪雨は

旧城下町の国道を瞬く間に支配する

凹凸に満ちた車道は延々と続く海と島々

タイヤに水飛沫の翼を生やす車という鳥は

その上を通り闇の奥へ飛び去らざるを得ない

僅かに並ぶ飲食店で寛いでいた客たちは

帰宅の嫌気と団欒の喜びを感じもうしばらくの籠城と決め込む

彼らが巨大な権力者の下で富む貴族ならば

視界の狭さ故に足元しか見えないまま

小さな傘に身を隠し一人家路を急ぐあの男は

まるで自分以外に目を向ける余裕のない小市民

これは全て集中豪雨という王の命によるもの

彼の様に孤独に歩み続ける者は他者や社会

そして上を気にすることなく自分だけの生活を送り続ける

彼らは雨の正体を暴くことは出来ない

何故ならその服は無色であるからだ

様々な色を持つ市民たちと比較されることなく

ただ全てを絶対的に見下ろし続ける色

故に雨の支配は永遠に続く

そして雨は正体を感じ付かれないように

次の見せしめにあの男を選ぶ

少し雨の勢いが弱まったために

彼は傘を下ろしそれを垣間見てしまったのだ

少し緑がかった夜空とそれを囲む黒色の雲

すなわち王の御姿を

だが彼は足元から目を離したために

躓き、海に身を投げ、鳥に啄まれる

それは季節通りに莊嚴に巡行する無色服の王

虚弱で散漫な者に警戒的な死をもたらす